山梨医大紀要　第2巻, 76－84(1985)

小説『悪霊』にみられるハイミトー・フォン・ドーデラーの保守的歴史観

村山雅人

I

ハイミトー・フォン・ドーデラー（Heimito von Doderer, 1896-1966）は、25年を費やしてようやく1956年に、代表作『悪霊』（Die Dämonen. Nach der Chronik des Sektionsrates Geyrenhoff）を完成させる。この小説でドーデラーは、世界生成の原理である「秩序」（die Ordnung）をテーマに選び、(1) 形式が内容に優先するという彼本来の創作の原則を破って、「今の私にとっては、内容がすべてである」(2)と日記に記しているように、内容に重点を置き、人間と社会のイデオロギー化の問題を取り上げている。このことは、彼がナチズムの政治的呪縛から脱した1937年以降、ドーデラーの心を深く捉えた問題であった。なぜなら、彼は左右を問わず政治的なイデオロギー化を、彼個人そして当時の社会全般にとっても、克服しなければならない根本問題と理解していたからであった。(3)そこで、一般に彼の文学を称して「非イデオロギーのイデオロギー」（die Ideologie der Ideologielosigkeit）と言われるように、いわゆるイデオロギー排除の試みが展開される。この問題はまず、1951年に出版された長編『シュトルードルホーフ階段』（Die Strudlhofstiege. Oder Melzer und die Tiefe der Jahre）で取り上げられる。無意識のうちに浮かび上がる思い出で構成されたこの小説は、1920年代の政治的にも経済的にも危機の時代にあったウィーンをその舞台にしているが、そこでは当時の社会背景は何ひとつ具体的に語られない。小説に舞台を提供している20年代は、「時代の断層」（die Tiefe der Jahre）という副題が示すように、過去との有機的な連続性を欠いた「第二の現実」（die zweite Wirklichkeit）と否定的に位置づけられる。そしてその克服が、作中人物の一人メルツァーの個人的な思い出を通して確認される過去と現在の日常生活の類似性によって達成される。つまりこの小説では、メルツァーの「人間化」（die Menschwerdung）によって歴史の連続性が証明されるのである。(4)

本稿で取り上げる小説『悪霊』では、この問題が具体的に、社会的な視野でも捉えられている。小説の主なる背景となっているのは、ファシズムと社会主義という政治的イデオロギーの対立にその端を発した、1927年7月15日のウィーン司法裁判所焼き打ち事件であり、この事件との関連において人間と社会が描かれる。したがってこの事件は、一見、小説のテーマであるかのような様相を呈する。実際には、この事件は政治的イデオロギーの妄想が作り上げた「第二の現実」、すなわち政治的な意味における「統覚の拒絶」（die Apperzeptions-Verweigerung）をあらわす一つの具体的な事例として描き出され、そしてその克服の一つの可能性が、当時の政治的現実とはほとんど無関係に生きている個人の日常生活を通して示される。それ故この政治的事件は、小説の背景となる20年代を否定的に象徴する役目を果しているにすぎないのである。

なる程、この小説に出て来る幅広い登場人物 — 貴族、市民階級、官吏、労働者階級、そしてウィーンの暗黒街の住人 — の中には、この政治的事件に政治的な意味で関与した者、あるいは、この騒乱を利用して犯罪行為を働こうとした者がいたことも描かれ、この事件が社会と個人に及ぼした影響についても触れられてはいる。しかし、作者ドーデラーの意図は、このような政治的な社会状況にまどわされない人間が、直観的にこの事件に漂う非歴史性の臭いを嗅ぎ取り、あるいはこの事件に対して全く無頓着に対応し、それとは別の日常空間において「人

山梨医科大学ドイツ語
（受付：昭和60年9月5日）

間化」を達成していく様を描くことにある。この事件はつまり、個人の永々と続く日常生活が唯一の現実であり、そしてそれが歴史を作ると考える作者によって、歴史の中に過って入り込んだ異物として処理され、その非歴史性を強調する理論が展開される。

したがってこの事件は、それが持っていた当時の政治的に緊張した背景から堀りおこされ、否定的にでもあれ、正当に歴史の中にその場が与えられることすらない。それ故、いかに小説『悪霊』が、実際に起こった事件を取り扱っていようとも、1920年代を前史とつながりを欠いた「時代の断層」と定義するだけで、その実相を描くことなく、まるでその時代の現実とは直接関わりを持たないかのような個人のレベルで、歴史の連続性を描いて見せようとした『シュトルードルホーフ階段』と、この小説は本質的に同じなのである。このように小説に描かれる社会的性格をおびた事件は、単に、ドーデラーがその克服を目指した「第二の現実」を象徴する具体的な事例でしかないのである。故に、社会問題を素材に「並例関係の小説」の手法を用い、社会全体を写し出そうとした試みにもかかわらず、小説『悪霊』は、いわゆる「社会小説」とはなっていないのである。

II

小説『悪霊』は「時代記」（Chronik）の体裁を取って、三部構成から成っている。しかし、これは歴史的事件を記述した時代記ではなく、記述者ガイレンホフの交友関係を軸にして、彼と接点を持つ人物たちの日常生活を、思い出とメモをたよりに綴った彼の個人的な時代記である。

第一部では、実業家、弁護士、銀行の重役、あるいは、いわゆる山師といった富や地位を持った、大抵はユダヤ系のブルジョワジーの人間関係、またそれとは対照を成す形で、“Die Unsrigen”と呼ばれる仲間に結集された、これまた市民階級の、一種ボヘミアン的雰囲気を漂わせる、先の人物グループより年齢層の若い芸術家、研究者、小規模自営業者等からなるグループが描かれる。そして、この二つのグループの人々の日常生活が、共に「第二の現実」に陥っているとして、否定的な側面から捉えられる。後者のグループの中心人物は、作家カイェタン・フォン・シュラゲンベルクと歴史学者ルネ・シュタンゲラーであり、小説の主たる語り手ガイレンホフも、この二人とのつながりによってその仲間に加わる。ちなみにこれら三人は、共に作者ドーデラーの分身ともいうべき人物であり、ガイレンホフともども物語の語り手として小説に登場する。このグループの中には、『シュトルードルホーフ階段』において「第二の現実」の中で生きる象徴的な人物として重要な役割を果たしたオイレンフェルトが、やはりかなりのウェートを持って登場している。このように小説『悪霊』では、『シュトルードルホーフ階段』の登場人物の内相当数の人物が、少しばかり設定を変えて登場している。

第二部では、第一部と対照的に、数人の人物が肯定的に描き出される。それを特徴的に示しているのがマリー・Kとレオンハルト・カカプサである。先の『シュトルードルホーフ階段』ではマリー・Kが、自分の不注意から電車事故に遭遇し、不幸のどん底に陥ったところで、彼女のエピソード、そして小説全体の物語も終わるが、小説『悪霊』では、彼女はこの不幸を見事に克服し、つまり彼女の現実を是認して、ドーデラーが言う肯定的な日常生活を送る。特にカカプサは、当時のドーデラーの世界観にそって作り上げられた、作者が最も好んだ人物形姿として登場する。このカカプサは労働者である。だが彼は、当時の労働者たちが政治的プログラムとしてかかげた、「階級闘争」に直観的に誤りの臭いを嗅ぎ取り、ラテン語の独習を通して、自己の内面に変革を遂げ、それまでの生活環境、いわゆる作者が言う「方言の境界」（die Dialektgrenze）を越え出ていく。このようにカカプサは、当時の労働者とは対照的に、「階級闘争」を通してではなく、自己の内面変革を通して自分の環境を引き上げ、その結果として、社会をも好ましい方向に修正することができることを示した、作者の理念を具現する人間形姿であり、ドーデラーがこの小説再開後の1952年になって初めて、彼の意図にそって作り上げた非常に作為的な臭いのする人物である。そして、互いに「第二の現実」を克服するマリー・Kとカカプサは、後に結婚し、彼らの「人間化」を達成することが暗示される。

そして第三部では、誤った政治的イデオロギーの産物として捉えられる1927年7月15日のウィーン司法裁判所焼き打ち事件が、表面上中心を占める。だが、この事件は重大な事件として歴史的に叙述されるのではなく、小説に登場するさまざまな人物たちの日常生活というきわめて個人的なパースペクティーブから克明に時間を追って記録される。その際、大抵はこの事件に対する否定的

な対応を通して、あるいは、自分の事ではなく、距離をおいて見せ物でも見るかのような目を通して語られていく。さらに、この政治事件はその途中から、ウィーンの暗黒街の住人たちが主導権を握った単なる暴動としてかたづけられ、その政治的意味を失う。だが、後から振り返れば、もともと政治的動機から発したこの無意味な騒乱は、結果的に後のオーストリアの自由を台無しにした事件であったと説明される。小説の最後は、作者が自嘲まじりに少々コミカルに描いているように、この騒がしい一日を無事切り抜け、いわゆる「人間化」を遂げた人たちの結婚ラッシュで終わる。

III

この小説の内容からも分かるように、作者ドーデラーの意図は、政治的イデオロギーの否定であった。なぜなら、「政治事は人間が行う最低で最も悪質な、上辺だけの行為である」(5)と、彼はみなしていたからであった。だが、1931年より始まり、1937年に中断せざるを得なかった初稿『悪霊』は、最終稿とは反対に強く政治的イデオロギーに規定されて構成されたものであった。一時期彼が師と仰いだヘルマン・スヴォボダの影響を受けて、1933年当時オーストリアではまだ非合法政党であったナチ党に入党していたドーデラーは、ユダヤ人が経済的に支配権を握っていた当時のウィーン社会の全体をアンチセミチズムの思想から否定的に映し出そうとする一つの「全体小説」としてこの小説を構想した。それをドーデラーは、1936年次のように言う。「私はユダヤ人のこの生活空間を、いわゆる三つの局面から、すなわち、家庭生活と愛欲に溺れた生活の局面、また、新聞やマスコミ界という局面、そして最後に、大銀行を世界にした経済活動の局面から映し出そうと試みた。」(6)

政治的には自由主義的色合のこいユダヤ人が社会で優位を誇った1920年代を、ドーデラーは、「節度を逸した時代」(unzüchtiges Zeitalter)(7)、つまり「腐敗した、自由で過度に開化した第二の現実」(8)と認識し、その克服の可能性を、彼はナチズムに見い出したのであった。なぜなら、当時ドーデラーは、自ら告白するように、このファシズム政党に「現実を創造し、また、現実を修復する力」(9)があると信じたからであった。しかし、この初稿『悪霊』は、ナチ党からの脱党、その後のカトリックへの改宗（1940）という作者の大きな思想的転換により、第I部18章の途中で中断したままで終わることとなった。そして、1951年に再開されたこの小説においては、当初の構想の意図は、ほとんど認め難いほどに修正された。それをドーデラーの批判的研究者であるA・ライニンガーはつぎのように指摘する。

「あらたに始まった最初の17章の改作において、ドーデラーは個々の現象をイデオロギー的に解釈した箇所、あるいは、世界観に規定され、まさにこの意味において積極的なグループの組織化を想起させる箇所のすべてを取り除いてしまった。このことにより、いわば個々の要素を繋ぎ止めていた中心となる構造枠が取りはずされてしまったのであった。」(10)

事実、この小説では以前のアンチセミチズムのイデオロギーは、否定的に描き出されるユダヤ系のブルジョワジーたちの姿と、ドーデラーにおいては全体国家の理論と結びつく倒錯した性的イデオロギーに基づくシュラゲンベルクの「肥満体女性の理論」に、かすかにその痕跡をとどめるだけである。

新たに最終稿で、政治的イデオロギーの否定に立って、ウィーンのボルシェビキ的革命思想が、徹底的に批判される。この対象選択に、作者ドーデラーのきわめて保守的な思想が明らかになり、また同時に、いわゆる偏狭なイデオロギー化の排除をかかげる作者が、過去に自ら犯した誤りであると公言してはばからないナチズム支持に対する反省の欠如も明白となる。作者がこの小説で批判的に取り上げるボルシェビキ的な思想による社会改革の動向は、小説の舞台となる1927年当時には、すでに過去のものであり、時代はむしろファシズムの方向へ進んでいた。ドイツやオーストリアにおける社会主義革命の可能性は1920年代前半にすでに潰えていたのである。そのことは、作者がこの小説に取り組んでいた1950年代には、歴史的事実として周知のことであったはずである。作者ドーデラーが、自分自身の反省に立って、イデオロギーの妄想に支配された社会を「第二の現実」として捉え、その誤りを正し、歴史の流れを正道にもどすことが彼に課せられた小説家としての使命であるとすれば、当時の状況、また、作者個人の状況を見ても、第三帝国の時代がその対象となってしかるべきであろう。それが、労働者階級の目指す「階級闘争」を通しての社会の改革にその鉾先がむけられている点に、この小説の中で開示されるドーデラーの世界観と彼の歴史認識を解く鍵があるように思われる。

Ⅳ

小説『悪霊』でドーデラーは、ガイレンホフを時代の証人と見立て歴史を記録しようとする。その際、そこで取り扱われる時代を象徴するものとして、1927年のウィーン司法裁判所焼き打ちとその前史が対象に選ばれる。が、作者は通常の歴史記述がそうであるように、この政治的、歴史的出来事に重点を置いて時代を記録しようとはしない。なぜなら、作家であり歴史学者でもあるドーデラーは、いわゆる世界を揺り動かすような大事件が、永々と続く歴史を形成するとは認識していなかったからである。それを彼は、1958年に出た『オーストリア — 写真で見る文化』（Österreich — Bilder und Kultur）の序文でつぎのように言う。

「今日、歴史上の生活はもはやほとんどその生活自体を無視して起こることでしかない。しかしまったくもって、もはや私たちは、〈歴史〉を〈政治史〉と同一視するいかなる根拠も持ち合わせてはいないのである。そして、ランケ、ニーブーアあるいはモムゼンのような大学者といえども、私たちの日常の最も重要なことを記録するとは思われない。むしろ、それを行うのは小説という文学なのである。」(11)

つまりドーデラーは、ランケに始まる近代以降の偉大な歴史学者が記述する政治的な大事件を記した歴史は、決してそこで記述された時代の実相を写し出していないと断言するのである。そして、時代を正しく記録できるのは小説であると主張する。だがドーデラーは、歴史的な事件に叙述の重点を置き、個人の生活や運命を、そこに描かれた事件と強引に絡ませて物語を形成していく歴史小説を、「ばかげたものである」と否定する。(12)そこで、歴史小説作家とは違う、真実の歴史記述者としての小説家の課題を、ドーデラーは日記（Tangenten）の中で、歴史的な大事件の陰に隠れて、静かにそして間断なく続いていく個人の日常生活に光をあて、それを記述することであると説明する。

「小説家とは彼の時代を、なにか事こまかに、あるいはスローモーションで記録を取るかのように書く歴史記述者ではない。そうではなく小説家はその時代に何か大事件があったとしても、そこにはまた、生活と現実があったことを記録し、そしてそれを重視するものである。」(13)

歴史の記録者たる小説家のこの基本態度をドーデラーは、ガイレンホフを使って小説のはじめで明らかにする。

「私が始めたことは、つまりある一つの人間のグループ全体を記す日記以上のものでも、またそれ以下のものでもありません。しかし、ただ単に一つの共同体の日記、たとえば航海を記した日記あるいは蛮族の遠征を記録したようなものではなく、私はいわば、個人一人一人のために日記を付けたのであり、それらの人々から目を離さなかったのです。」（S. 9f.）

このことからも、作者の意図は小説の背景を成している1927年の歴史的事件とその前史を記述することにあるのではなく、個人の日常生活を広範囲に描き出すことにあることは明らかである。ここに記される歴史的事件は、否定的な生活の局面、すなわち「第二の現実」と肯定的な生活の実体である「第一の現実」との対照を鮮やかに浮き出させ、そして、歴史の連続性を証明するための一つの媒体にしかすぎないのである。

日常生活が「存在のより高次元の実存性を示す一つの段階であると同時に、存在の比類ない、まさしく唯一の尺度」(14)であるとの見解に立つドーデラーは、歴史を形成するのは個人の生活であると主張する。つまり、この世界には、「平凡な日常があるだけであり、それ以外には全くなにも存在しない」（S. 1029）のである。この小さな歴史の構成要素が、根本的には歴史全体を形成するのである。したがって、生活という織物から任意に一本の糸を抽出したとしても、その糸は全体を貫き、広く生活を映し出すと、ドーデラーは考える。なぜなら、「あらゆる人の生涯のどんな些細な局面にも、その人の人生全体が含まれているからである。」（S. 11）

このように歴史の根幹を成すのが人間個人の日常生活であると捉えるドーデラーは、個人の生活が、いかなる外的な作用を受けようとも、過去、現在そして未来へと不断に、かつ、基本的には同じリズムを持って続いていくものと確信する。彼はこの事実を、一見そのリズムが跡切れたように思える、表面的には激しく揺れ動いた1920年代に目を向けて証明しようとする。ドーデラーは、この時代を節度を欠いた時代と規定して、それを次のように説明する。「病的な現象のすべての原因は、究極において、人間があまりにも自己自身と親しくなりすぎたことにある。つまりは無節操なのである。それが私たちの時代の病根である。したがって、私たちは全くけじめのない時代に生きているのだ。」(15)このような時代にあっては、人間は自分にとって最も好ましい表象を勝手に作

り上げ、それを実現しようとする。いわゆるこれがイデオロギーであり、個人と時代が一体となって有機的な繋りを保った歴史の否定を意味する「第二の現実」のあらわれである。その具体例が、この小説で取り上げられた1927年7月15日のウィーン司法裁判所焼き打ち事件である。まさにこの事件は、人間と社会のイデオロギー化を象徴的に示す出来事であり、また、その後の泥沼のイデオロギー闘争が続く暗黒時代への突入を物語るものであると、ドーデラーは捉える。故に彼は、この事件を「オーストリアの自由の壊滅的な敗北」(S. 1328)を招いた出来事と歴史に位置づける。

ドーデラーは、あたかも歴史の流れを人為的に止め、その流れを変えようとした行為でもあるかのように見えたこの政治的事件を持ち出すことによって、その非歴史性を暴き出そうとする。その際、彼の基本にあるものは、彼が不変性を確信した人間の日常の営みである。そして、現在と過去の生活に認められる類似性を、ドーデラーは彼の分身である歴史家ルネ・シュタンゲラーから発した意見であるとして次のように説明する。

「私たちが私たちの子供時代と非常に近似した形で、あるいはまた、私たちの生活にかつて存在したある時期と非常に近似した形ですごす時期というのが、確かに存在するものです。そしてその過去の生活の心理状態を、私たちは今まったく同じように再度受け入れているのであり、当時の言葉や光景、臭い、そしてまたその他の印象を、私たちは一つ一つ心の底から思い出すことでしょう。したがって多くの瞬間に、私たちを過去から隔てているのは、一枚の非常にうすい壁でしかないかのように思われるのです。そこでいわゆる〈今〉と〈過去〉とは、まるで私たちが逸れ得ない一種の幻覚でしかないようにも感じられるのです。」(S. 109)

この歴史観は、不断につづく個人の日常生活が歴史を形成するとの確信から発するものである。したがって、過去の歴史の中に現在の状況と同じ現象を示す時期がかならず存在すると理解するドーデラーは、現在のことを知るには過去のことを知らなければならないと考える。

「ある時代をその外見、あるいは現象および形態から理解すべきであるとすれば、私たちはこの時代をはるかに越え出て過去に戻り、その対象となる時期にあらためて照準をあわせなければならない。ただ現在から回顧的にだけ眺めているだけではだめなのである。」(S. 445)

このように、歴史は単に過去のことに対する孤立した知識を修める学問ではなく現代と過去とを弁証法的に考察することによって普遍なるものを確認し、未来への展望を可能にするものであると、彼は考える。

「歴史とは決して過ぎ去ったことを知ることではなく、本当は未来についての学問である。すなわち、観察された時代にはそれぞれ未来に通じるもの、あるいは、そうあろうとしたものがあったことを修める学問なのである。」(S. 445)

V

このように、あらゆる時代は、ある種の内的な類似性によって、ある特定の過去の時代と結びつくという歴史認識が、ドーデラーの歴史観のテーゼを成している。この認識の根底には、存在の普遍性を主張し、過去から現在へと続くあらゆる存在にはかならず類似的なものが認められるとのトミズムの“analogia entis”「存在の類比」の考え方があることは明らかである。その意味で、1940年のカトリックへの改宗は、ドーデラーの思想にとって大きな転機をもたらした。

この宗教的世界観に立つドーデラーは、社会生成のメカニズムが不変なる自然の法則に基づいて在るとみなす。そして、彼は世界の仕組みの普遍性を、人間が直観的に認識できると考え、現実をあるがままに受け入れることを主張する。それをドーデラーは、人間が世界に対して取るべき最も好ましい態度と考え、いわゆる「統覚」(Apperzeption)の概念を適用して次のように言う。

「真の統覚とは、いかなる場合も現状のまま保存することである。何かを正確に見ようと思えば、人はそれを変えてしまうことを望まない。したがって対象世界との関係における精神の根本的特徴は、保守的なのである。」(16)

「統覚」の概念に対するこのような理解は、その根本において、カントの超越論的な「統覚」に基づくものではなく、彼が日記(Tangenten)で言っているように、ゲーテの『イタリア紀行』の読後に得た、この古典主義作家の驚異的な経験的現実認識力、すなわち、現実をあるがままに受容する経験的「統覚」に基づくものである。(17)

この立場に立つと、現実を鋭く直視することなく、ある硬直した観念にとらわれて、それを実現すべく行動することは、すべて「デモーニッシュ」であるとして否定される。つまり、「人間とその周囲の世界に入り込んで、

その結果人間に経験的現実に対して自己の知覚を閉じさせ、そして人間を一つの硬直したイデオロギーの体系に閉じ込める作用を及ぼす」⒅力がデモーニッシュであり、その力の虜になった人間がこの小説の表題でいわれる「悪霊の人々」である。したがって「統覚」を拒絶して、自ら作り上げたイデオロギーの妄想により、本来整合性を持っている世界の流れを変えようと試みるのが現代人を特徴づける「愚行」（Dummheit）であると、⒆ドーデラーはみなす。そして、彼がこの小説で取り上げた社会主義者たちの司法裁判所焼き打ちが、政治的な意味での「統覚の拒絶」（Apperzeptions-Verweigerung）を示す象徴的な事例として示される。

この歴史事件は、当時ブルゲンランドを襲っていたファシストと社会主義者の対立が原因で、1927年1月30日のシャッテンドルフにおける社会主義者の集会に参加していた第一次世界大戦の傷痍軍人と、時に13才であったその甥が、二人のファシストの凶弾に倒れ、その後の陪審制裁判でこのファシストが無罪を言い渡されたことに抗議して、翌7月15日の非合法に組織されたデモ行進が直接の引きがねになった。だが先にも触れたように、この事件はいわゆる歴史的に考察され、それが小説の中で明らかにされるわけではない。1350ページ34章に及ぶ厖大なこの小説『悪霊』の中で、この事件とその前史は、たった2章（Im Osten, Das Feuer）に、それも否定的な視点からまとめられているにすぎない。ドーデラーは、当時の首相ザイペルが、この事件の根本的な原因を陪審員の誤った判断に基づく判決にあったと認めた⒇のとは違って、この裁判が当時世間一般にはほとんど注目に価しなかったとして一蹴し、この事件のそもそもの発端となった殺人事件を、単にイデオロギー抗争がもたらした政治的殺人と規定し㉑7月15日の事件を次のように解説する。

「この国民裁判は、つまり9対3の票をもって、起訴事実をすべて否定した。裁判長は無罪を申し渡した。翌1927年7月15日に、社会民主党の主導では全然予定されていなかったデモ行進を労働者たちが実行に移し、市の中心に向かった。彼らがデモを行ったのは、一人の子供と一人の傷痍軍人を殺した犯人が無罪になったからではなかった。そうではなく、その子供が労働者の子供であり、その身障者が労働者であったという理由からであった。〈群衆〉は、かつて彼らの指導者がその出現にしばしば反対する見解を述べていた階級裁判を要求した。市民は国民裁判の判決に、つまり彼ら自ら下した判決に反対して群がった。これによって自由は崩れ去った。」（S. 624）

ドーデラーはこの事件を、政治的イデオロギーが生みだす統覚の拒絶による現実変革の一つの現象であると捉え、その思想の非歴史性を、作中人物ガイレンホフと宮延顧問官ギュルツナー＝ゴンタルトの会話を通して、暴き出し、批判する。

ドーデラーによると、いわゆる革命家とは「自分のおかれた状況がひどいものであり、耐えられないと思うため、一般的な状況を変えたい」（S. 484）と思う人間である。すなわち彼らは、現実にそうある世界の中で、それに耐えて生きる能力がきわめて弱いが故、「現実に存在している状況に対して、そうあるべきだと考える一つの状況を、好んで〈理想化し〉絶対視してしまう。」（S. 487）したがって、このような人間にとっては「どんな現実も絶対的ではなく、またどんな現実も、生活が絶えず自然に従っている永続的な法則を表しているものではないのである。」（S. 486）このような「統覚」の拒絶の現象が人間に起こりうる原因は、ひとえに「自己のにぶい眼によって現実」（S. 486）を見ているからであると、ドーデラーは言い、この誤りが革命家を生み出すと断言する。

Ⅵ

このドーデラーの反革命思想を体現する使命を担って小説に登場するのが、レオンハルト・カカプサである。作者の「偏愛」㉒が込められているこの人物は最初から、ドーデラーの意図にそって作り上げられた、なにか不自然な感じを与える人物形姿として登場する。

すなわち、カカプサはウィーンの工場労働者という設定で小説に登場する。だが、当時の労働者が彼らの政治プログラムにそって、「階級闘争」を通して社会の改革と彼らの地位向上を目指したのとは全く対照をなす人間として姿を現すのである。「カカプサは、きわめて穏健な社会民主党員であった。だが、彼は政党やその原則に拘束されることになじめなかった。そして、おそらくは階級意識そのものにもなじめなかったのであろう。」（S. 117）この人物の状況設定からして、当時の政治的イデオロギーに動機づけられて社会変革を思考する人々の反証を示すものとして、彼がここに登場していることは明

らかである。

そしてそれは、彼が偶然の事の成り行きからラテン語文法書を手に入れることになった時に言う、彼の時代の捉え方により明確に表現される。「労働者が不幸で希望もない人間ではないことが証明されねばならない。(中略)そして、労働者には今やすべてが、それも今すぐこの場で、階級闘争などする必要もなく、開かれていることを証明しなくてはならない。」(S. 161) このように、労働者であるレオンハルト・カカプサは、彼らの階級が押し進めている政治闘争に歴史を無視した誤りを直観的に感じとるのである。

つまり、彼は感覚的に事物の真理をみきわめる直観力を持った人間として小説に登場する。それをドーデラーは、「彼は臭いを嗅ぎ取るためにこの世に生まれてきた」(S. 139) と言う。臭いの感覚および臭いを嗅ぎ取る嗅覚は、ドーデラーの場合、人間の存在の根源と結びついていて、それは一つの絶対的な真理となる。(23)それを彼は、「臭いを嗅ぐことを通してすべては明白になるはずだ。つまり、嗅覚は一つの力であり、他のあらゆるものに優先して嗅覚が来る。嗅覚の真理を疑うものは何もない」(S. 121) と、小説で説明している。

時代の状況の誤りを直観的に感じ取ったカカプサは、いわゆるラテン語学習を通して自己の内面を変革し、それによって、身をもって自分たちがおかれている境遇が決して不当なものではないことを証明しようとする。つまり、ラテン語学習はこの小説で、単にローマに始まる伝統的なヨーロッパの人文主義的文化を継承するという意味が含まれているだけにとどまらず、自己の内面を個人として表現する力を獲得することを可能にするものとして位置づけられる。したがってラテン語学習は、この群衆の時代の中にあって、その状況に対し距離を保つことを可能にし、それによってまた、新しい現実認識への途を開くことを可能にするものである。(24) こうしたラテン語学習により、自己変革を遂げたカカプサが、大貴族クルワ皇子から彼の司書に請われた時、彼がおかれている現状の身分を変えることが本意でないとして、一度はその申し出でを断った彼の言葉に、作者の示そうとする「統覚」に基づく人間の生活態度が明らかになる。「私はこれまで一つの手本を示さなければならないと考えてきました。つまり、現に私がいまいる生活環境でも、自由を得ることが可能なんだという手本をです。もし、私がこの私の境遇を変えてしまえば、私のこれまでの考えはくずれてしまいます。私は職業を変えることを不誠実だと思っています。それは、私の職業に対して不誠実だと思っているのではありません。そうではなく、まさに先ほど述べましたささやかな手本を示すために私が召し出されている、その生活の状況に対して不誠実だと思うのです。」(S. 1111)

まさしく、このカカプサの言葉の中に、世界はその本質において自然の合目性を持った不動の創造の原理に基づいて在ると見る作者ドーデラーの非常に宗教性の色合の強い世界観が表現される。世界に存在するあらゆるものは、それぞれ互いに定められた機能を持って存在しているとの創造主義の理念に基づくこの考えは、すでに彼の自己変革の出発の時点でカカプサが持っていた確信であった。「労働者は自分の仕事が必要なんだということ、それも単に、生きてどうやら命をつなぐためだけでなく、まさに他のものに対する均衡という意味でも、自分の仕事が必要であり、このことが、それこそ唯一本当の真実なのだということを証明しなければならない。」(S. 161)

このように、世界は不動の自然の原理に基づいていると認識するドーデラーにとって、人間の取るべき態度は、世界をそのまま受け入れることである。その理由をドーデラーはすでに1939年に次のように言う。「人間精神の最も奥深い段階および最も高次元の段階において、人間は存在するものを、それもいかなる場合においてもまさしくこの存在するものを、完全に正当とみなすのである。世界を良くしようなどということは、精神の最も奥深い段階ではいまだかつて行われたことがないし、精神の最も高次元の段階ではとっくに放棄されたことであった。」(25)

この認識に立ってこの小説では、第一次世界大戦後の社会に台頭した思想が、当時の政治的出来事を例にとり批判される。そして、その具体的な反証として作者ドーデラーは、内面の変革、いわゆる「人間化」を遂げた人間が、その結果として、自己の境遇も自然な形で引き上げることができるということを、カカプサの場合で実証しようとした。彼は、いわゆる人間の倫理的精神的発展を遂げて、労働者から司書になり、インテリとなっていく。これはまさに一面において、善いことを行えば褒美がもらえるという典型的な通俗小説的な「出世物語」の特徴を示しているともいえる。そしてこの図式は、彼の他の登場人物のエピソードにも大抵あてはまるものである。ただ、ドーデラーの場合、この図式はその根本においてオーストリアに伝統的な宗教的世界観に基づく「創

造主義」（Kreationismus）によって、万象の変革を拒絶する「不動主義」（Immobilismus）から発するものであると考えるべきであろう。この世界観に基づけば、小説『悪霊』で示される如く、偶然もすべて人間の運命となってしまうのである。このドーデラーの小説はまさに、R・バアウァーが記したオーストリア文学の特徴を、そのまま映しだすものである。

「文学はわれわれにあらゆる変革、特に、無秩序と混乱、それもいやおうなく人間に恣意的行動を取らさずにはおかない、あの無秩序と混乱から守られている世界を捜し求める人間を呈示する。」(26)

注

小説『悪霊』からの引用は、直接本文中に引用箇所の頁数を記入した。なお、テキストとしてHeimito von Doderer : Die Dämonen. Nach der Chronik des Sektionsrates Geyrenhoff, München 1979を使用した。

1）Vgl. Heimito von Doderer : Tangenten. Tagebuch eines Schriftstellers 1940-1950, München 1964, S. 47.

2）Heimito von Doderer : Commentarii 1951 bis 1956. Tagebücher aus dem Nachlaß, hrsg. v. Wendelin Schmidt-Dengler, München 1976, S. 84.

3）Vgl. Dietrich Weber : Heimito von Doderer. Studien zu seinem Romanwerk, München 1963, S. 76.

4）「統覚の拒絶」（Apperzeptions-Verweigerung）が作り上げる「第二の現実」（die zweite Wirklichkeit）を克服して人間が「人間化」（Menschwerdung）を達成するメカニズムについては、拙論「ハイトミー・フォン・ドーデラー　小説『シュトルードルホーフ階段』――Menschwerdung（人間化）における『発展』とは――」（「山梨医科大学紀要」第1巻　1984年　58頁－66頁）を参照。

5）Tangenten, S. 471. これは元々F. ブライが小説で言った言葉である。

6）ドーデラーの未出版の日記〝Commentarii〟, 1936年7月21日。ここでは、Anton Reininger : Die Erlösung des Bürgers. Eine ideologiekritische Studie zum Werk Heimito von Doderers, Bonn 1975, S. 37より引用。

7）Vgl. Heimito von Doderer : Die Strudlhofstiege. Oder Melzer und die Tiefe der Jahre, München 1973, S. 684.

8）Hans J. Schröder : Kritische Überlegungen zum Wirklichkeitsverständnis Doderers, in : Heimito von Doderer 1896-1966, Symposium, anläßlich des 80. Geburtstages・Wien 1976, Salzburg 1978, S. 70.

9）ドーデラーの未出版の日記〝Commentarii〟, 1936年8月25日。ここでは、H. J. Schröder, a, a, O., S. 70より引用。

10）Anton Reininger :〝Die Dämonen〟: totaler Roman und antirevolutionäre Traktat, in : Literatur und Kritik 80, S. 600.

11）引用はD. Weber, a. a. O., S. 210による。

12）Tangenten, S. 229.

13）Tangenten, S. 229f.

14）Hemito von Doderer : Repertorium. Ein Begreifbuch von höheren und niederen Lebens-Sachen, hrsg. v. D. Weber, München 1969, S. 146.

15）Die Strudlhofstiege, S. 684.

16）Epilog auf den Sektionsrat Geyrenhoff, Diversion aus 'Die Dämonen', 1940/44, in : Tangenten, S. 92.

17）Vgl. Tangenten, S. 345, 352f., und Wolfgang Düsing : Erinnerung und Identität, Untersuchung zu einem Erzählproblem bei Musil, Döblin und Doderer, München 1982, S. 186f.

18）Martin Swales : Ordnung und Verworrenheit. Zum Werk Heimito von Doderers, in : Wirkendes Wort 18(1968), S. 100.

19）Vgl. Die Dämonen, S. 828.

20）Vgl. Manfred Jochum : Die Erste Republik in Dokumenten und Bildern, Wien 1983, S. 80.

21）Vgl. Die Dämonen, S. 980.

22）Vgl. Die Dämonen, S. 580.

23）Vgl. Tangenten, S. 464 und Repertorium, S. 98.

24）Vgl. A. Reininger :〝Die Dämonen〟: totaler Roman und antirevolutionäre Traktat, a. a. O., S. 607.

25）Repertorium, S. 82.

26) Roger Bauer : Die Welt als Reich Gottes. Grundlagen und Wandlungen einer österreichischen Lebensform, Wien 1974, S. 41.